

まとめ役となりました。仕事は伐採、鉄道新設工事でした。そのうち一番苦しかったことは、冬、手足が凍りつく寒い夜、汽笛が鳴れば速やかに起きて、動いている汽車に飛び乗り砂利を線路の両側にまく、まさ終われば動いている汽車より飛び降りて帰る。何とか暖まればまた汽笛が鳴る。身も心もくたくたでした。しかしノルマは汽車から砂利を下ろす時間のみで、往復の時間は含まれていませんでした。ああ殺生など幾らかけ合ってもナシのつぶてでした。再度話し合いをした結果、改善されましたが、私はその責任をとって他の収容所に転出させられました。

その後転々として回され、あぐくの果ては反動分子として他の人とともにムリー地区将校収容所に入れられました。人員は五百人くらい、尉官ばかりの収容所で、私はその責任者の一人でした。仕事はなく、ただ健康管理に精を出していました。その後コムソモリスクの収容所に入所しました。人員は約千人くらいでした。毎日の仕事としてはありませんでした。

二十二年十月、全員汽車に乗りナホトカ着、一、二、

三収容所を経て乗船、公海に出たらばソ連兵は下船、日本の船員の顔が見えたときのうれしさ、「皆様大変ご苦労さまでした。今、皆様の家庭へ電報を打っています。」と安心ください。船は函館港へ向かっています」とのことでした。

シベリア抑留記

大阪府 吉岡芳延

私は、大正六年十一月六日に鳥根県松江市下佐陀町にて出生、四歳の頃、鳥取県米子市愛宕町七五番地に移転し、鳥取県立米子中学校三年修了にて大阪鉄道局米子機関区に勤務し、昭和十二年九月中国山西省陽泉機関区に派遣され、十四年春に帰国復帰しましたが、同年九月南満州鉄道株式会社、機関士として勤務中、興寧線（東寧―図們間）にマレー半島より牡丹江に出張検閲に來られた山下奉文中将を蒼林の駅にて迎え、輸送したのは忘れられない記憶の中にあります。

昭和二十年七月十五日に召集を受け、吉林省大石頭の第一方面軍第二三九師団第三二八連隊に入隊しましたが、九月十日には吉林陸軍病院教化分院に入院し、その後間もなく十八日には同分院においてソ連軍により武装解除を受け、当地（敦化）にて雑役に服しながら日を過ごし、十一月十日に出発「トウキョウダモイ」に心をはずませましたが、十一月二十五日、着いたところはコムソモリスク、ホルモリン地区で、第三〇五収容所に収容されました。収容所といえども囚人収容所のバラックがあるだけで、我々はほとんど「テント」生活で、しかも僻地のため糧秣の補給が全然なく、携帯して入った米、大豆でスープをつくり、約半年間をこのような状態で過ごしましたが、この時期シラミが発生し、発疹チフスのため半数近くが死亡いたしました。このシラミについては、寒中に下着を脱ぎ裸になり、外で払い落とすわけです。

前に述べましたように、私は入院中で病弱のまま抑留されたわけですが、私たちの部隊は戦闘激戦を交えた地域の部隊とされたため、その抑留地も辺境の地で

あり、ただ生活するだけでも苦境であり、併せて食糧不足の地において、しかも森林の伐採、道路工事、建築作業などすべて経験のない慣れない作業であり、死亡者の出るのもまた無理のないことで、私の生きて帰れたことは実に幸運というほかないと思っております。

しかし、この苦痛と恨みはだれにも申し上げることはできません。二十一年の正月には肺炎を引き起こし第三病院に入院しましたが、その病院にはソ連人を含めて百人の患者がおり、ある程度の見せかけの回復を待って二十二年八月にダモイのためナホトカの集結収容所に送られ引揚船に乗るところ、最後になつても私の名前が呼ばれませんでした。なぜかというと、私が満鉄の機関手をしていたため、残つてボイラーをやれということでした。

喜びもつかの間、涙をのんで残留しておりましたが、医者（日本人）が、あなたは何か病気がないかと聞かれるのでヘルニヤで困っていると申しますと、それでは帰国できるように申請してあげると言ってくださり、二十二年十月十八日にナホトカより乗船、二十一日に

舞鶴港に入港、上陸復員することができました。

このように、ソ連では丈夫で働ける者とか技術のある者はいつまでも使い、病人、又は当地で民主教育に積極的で、いわゆる、反動と闘える者を帰国させたように思います。

復員後も頸椎変形、右肋骨カリエスなどシベリア抑留のお土産を抱えて今日まで生き延びてきました。

シベリア抑留記

広島県 円光寺 秀頼

私は、昭和二十年八月九日、満州牡丹江掖河の部隊で初年兵教育を拝命（連隊長より）、特に現役兵である朝鮮壮丁百五十人の教育担当者として、日本軍としては初めての徴兵制度による第一号の兵士を二十年六月二十五日京城に連れにいき、この掖河において現役初年兵の教育を行っていました。初めての徴兵制度であり、各部隊とも逃亡する者続出。直接の私たち教育隊

の者だけでなく、部隊長も大して気にされてはいませんでした。が、部隊としては部隊長、班長と打ち合わせを行っていました。

八月九日のこと、朝方に爆音がしたので、自宅におられる部隊長のもとに走りしました。部隊長は素知らぬ顔で「部下には言わない方がよい、特に朝鮮人初年兵教育をしているのだから、ソ連不法侵入のことは黙っている方がよい」とのこと、その日も平常どおり初年兵教育に専念しました。

当時、私の師団は、各部隊とも留守要員だけを残して鏡泊湖の北側の山で陣地構築をしていました。八月十一日夜、本隊より「ソ連軍侵入、直ちに初年兵を連れ鏡泊湖北の陣地に集合せよ」の無線命令に従い、夜間訓練を兼ねて本隊に向かいました。

私たちが本隊に向かう途中、寧安の町を過ぎるころは朝になり、邦人（含む開拓団の人）は軍の命令を受けて続々南下しており、ほとんど女、子供で、わずかな身の回り品を両手に持ち、親は小さい子を背負い、歩けない子供は道端に置き去りにされ、それらの子が